

【研究ノート】

コトノハ考

津 曲 敏 郎

1. はじめに¹

本稿では日本語の単語コトバについて、その語源を再考して、あらたな見方を提示する。さらにコトバという語の成り立ちが世界的もユニークであることを確認するための比較材料として、日本語と典型的に似ているアルタイ諸語を取り上げ、関連する語の意味区分について考察する。その概要は以下のとおりである。

日本語の単語コトバ（かつてはコトノハとも²）は語源的にはコト「事／言」とハ「端」（「葉」は当て字）からなる複合語であるが、なぜ「事／言」の「端」なのかについて、これまでの語源説はおおむね次のような説明に終始していた。すなわち、「コトバは現象や事実のすべてを表わすわけではなく、その一端を表現するに過ぎない」、「コトバはしばしば内実を伴わない口先だけのものでありうる」、したがって「端」だ、というものである。私見では、中味であるコトに対して、その外側の現れを「端」と表現したものとする。言い換えれば、コトバ（という言葉）は「表わされるもの」と「表わすもの」との関係からなる記号の二重性をこの一語に具現していると見ることができる。本来、媒体（表わすもの）としての意味であったが、中味（表わされるもの、意味）を含めて使われるようになった。中味の真実性を強調する言葉にマコト（真-コト）があるが、かつて漢字をマナ（真名）と呼び、カナ（仮名）と対比させたのも、意味を持つかどうかとその動機と考えられ、コト／ハの関係と一部重なる。

日本語コトバが「単語」も「言語」も意味するのに対し、アルタイ諸語のうち、チュルク諸語・モンゴル諸語では「言語」は「舌」と共通の語であり、「単語」と区別されている。この点でツングース諸語は日本語や韓国語と同じ意味区分のタイプと見られる。

2. 従来の語源説

「言葉」「言の葉」の表記にも見られるように、コトバの後半部ハを繁茂する「葉」に関係づける見方は古くからあり、『古今和歌集』仮名序（905年）の「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」にもうかがえる（山口 2008:359）。しかしながら、これは語源俗解にもとづく当て字と言うべきもので、今日の語源説の多くは、「端」であると見ている³。今日、自立語としてはハシ、ハジだが、ヤマノハ（山の端）、ハギレ（端切れ）などの用例から、ハだけで「端」の意味を表わした。いっぽう、コトのほうはそれ自体で「言」「事」の両方を意味し、かつてこの両者が未分化であったことから、「言」のほうをコトバ・コトノハとして区別するようになったとされる⁴。

では、なぜコトの「端」なのか？ これについて、大野ほかの「ことば」の項目（1974:504）では次のように説明している：「語源はコト（言）ハ（端）。コト（言）のすべてではなく、ほんの端にすぎないもの。つまり口先だけの表現の意が古い用法」。

筆者が参照しえた語源説の多くもこの説明の域を出るものではない（山口 2008、小松・鈴木 2011、増井 2012）。唯一、杉本（2005:287）が「端」ではなく「葉」説をとり、次の

ように述べているのが注目される：「〈は〉は葉。木も葉の出ることで、どのような木の種類か判明する⁵。そのようにコトノハで言（事）の何を表現せんとしているのか、内容、意味が明確となり、事と異なり、事を代行する符号、記号という理解をもつようになった。〈コトバ〉の成立はそうした点で重要」（下線は引用者）。

筆者は「葉」説にはくみしないが、コトバの記号としての側面に言及している点で（ただし、核心を突いた述べ方になっていないが）、以下に述べる筆者の見方に通じるものがある。

3. 記号の二重性の具現としてのコトバ

上で見た従来の語源説にある「コト（言）のすべてではなく、ほんの端にすぎないもの。つまり口先だけの表現の意が古い用法」（大野ほか 1974:504）という見方を一歩押し進めてみると、「（コトノ）端」と言ったのは、言葉の「中味」に対して「上っ面の現れ」を意図したものではないかというところに行きつく。つまり、コトバ／コトノハにおいて、コト（事／言）は「表わされるもの（内容、意味、ことがら）」であり、ハ（端）は「外側の現れ＝中味を表わすもの、媒体、音形」と捉えることができる。中味（意味）を表すための手段、それこそがコトバだということである。ソシュール流に言えば、前者が所記 *signifié*（概念）、後者が能記 *signifiant*（聴覚映像）にあたると言える。コトバの構造を図式的に示した図1と、ソシュールによる言語記号の図式（図2：ソシュール／小林訳 1972: 96）とを参照されたい。ソシュールが両者をコインの両面のように表裏一体のものとして捉えているように見えるのに対して、日本語コトバは中味とその外皮のような関係で捉えているといえよう。

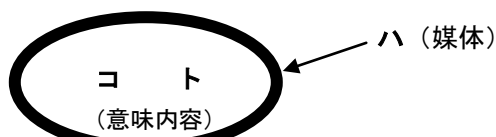


図1 「コトバ」の構造



図2 ソシュールによる言語記号の図式

つまり、日本語コトバは記号の二つの構成要素からなると見ることができる。ソシュールが記号としての言語の特性を明確に述べる千年以上も前に、日本人がコトバという言葉そのものの中にその二重性を込めていたとしたら、注目すべきことである。管見の限り、日本語コトバの語源に関連してこの点を指摘したものはなく、また世界の言語のなかで「言葉」にあたる語がこのような成り立ちを示す例もないのではないと思われる。

もちろん日本語のコトは概念そのもの（事）だけでなく、その音形を含めたセット（言、すなわち言葉）をも意味しうる点で、能記から完全に切り離された所記というわけではない。さらに、ハのほうも、コトノハにせよコトバにせよ、コトと何らかの従属関係に置かれている以上、コトと切り離して対立的に捉えることが可能か、という疑問も生じうる。言うまでもなく、ソシュールにあっては、能記と所記の「恣意性」（無契性）こそが記号の

重要な要件をなすが、コトノハではハがコトの一部として（有契的に）捉えられているのではないか、という見方もあながち退けられない。こうした点で、ソシュールの記号の図式と単純に比べられないことも事実である。

しかし、「事」と「言」が未分化だったからこそ、「言」の能記的側面を指して（コトノ）ハとして区別する意図があったと考えることができよう（次節で述べるように、それは所記も含めた全体を指しても使われるようになる）。また「コト」ノ「ハ」という関係が、たとえば上でもあげた「ヤマ」ノ「ハ」と同じ関係であるとは限らない。「山の端」が山の一部分をなす（全体／部分の関係にある）からといって、「コトの端」もそうであると決めつけることはできない。事実、助詞ノは前後の要素に応じてきわめて多様な関係を表わしうる。たとえば「コトに関する端」「コトを表わすための端」をコトノハと呼ぶことに違和感はなかったはずである。

4. コトバのさまざまな意味

コトバ／コトノハという（語源的）複合語の統語的主要部は言うまでもなくハであり、本来は媒体（音形としての言葉）のほうだけを意味したと考えられる。このことは「口先だけの表現の意が古い用法」（大野ほか 1974:504）というこれまでの見方とも合致する。しかしながら、容れ物（媒体）が中味（意味）を含めた全体を表わすようになるのはきわめて自然なことである。日本語に限らず、どの言語でも、「言葉」にあたる語はこうした意味的二重性をもっていると言えよう。日本語に即して言えば、コトバには記号の特性に応じて次の二つの意味があることになる。

コトバ1＝（コトノ）ハ 媒体としてのコトバ

「偉そうなことを言ったってコトバだけだ」

コトバ2＝コト＋ハ 記号としての（意味を伴う）コトバ

「みな彼のコトバに感動した」

いっぽうコトバは、それが表わす言語単位に応じて少なくとも三つのレベルを区別することができる。

コトバ①＝単語 「このコトバを辞書で引く」

コトバ②＝句／文／談話 「これはクラーク博士のコトバだ」

コトバ③＝言語 「彼は三つのコトバを自在に話せる」

このうち、特に①と③の区別については6節でも取り上げる。

5. 文字体系との対比

コトの真実性を明示した（歴史的）派生語にマコト（＜真-コト）がある。同じ接頭辞を冠した語にマナ（真名）があり、カナ（仮名）と対比された漢字の古称である。なぜ漢字が「本物」で、仮名は「仮」の文字なのか？ 一般的には、日本語にとって漢字こそ歴史的に先行する、威信のある正式な文字であるのに対し、仮名はそれを崩したり省略したりして作られた「間に合わせ」にすぎないという認識があったためと言えよう⁶。その意識はマナという呼び方のなくなった現在も、完全に消えたわけではない。そのような認識は

もちろん重要な理由の一部ではあろうが、筆者は別の、おそらくより本質的な理由が考えられるのではないかと考えている。それは、漢字が意味を伴うのに対して、仮名はそれ自身では音しか表わさず、意味を持たないという点である。意味を伴ってこそ本物である、という認識は(マ)コトと(コトノ)ハとの関係と通じる部分があるように思われる(表1参照)。すなわち、日本語では伝統的に話し言葉でも書き言葉でも、形式(外形)より実質(意味)に高い価値を認めてきた、と言えよう。

	真正／有意味 実 質	周辺の／一時的 形 式
話し言葉	(マ-)コト	(コト-ノ-)ハ
書き言葉	マ-ナ	カ-ナ

表1 話し言葉／書き言葉における実質／形式の対比

なお、ナが物や人の「名前」の意味のほかに、かつては「文字」をも表わした、というのも示唆的である。どちらもある実体なり音なりを「表わすもの」という点で共通している。しかも、かつてナは実体と区別されにくかったとされるが⁷、これは「事／言」が不可分であったことと軌を一にする(いわゆる言霊思想)。「名のみ」「名ばかり」などの表現で実体を伴わないことを表わしたのは、「コトの端」が本来、実体を伴わない「口先だけの表現」であったことと重なる。つまり、ナにおいてもコトにおいても、かつて渾然一体としていた実体とラベルに対して、あえてラベルのほうだけを区別して表わす言い方が志向されたと言えよう。

6. アルタイ諸語の「単語／言語／舌」

4節でも見たように、コトバは「単語」から「言語」まで、さまざまなレベルの言語単位を表わす。もちろん必要に応じて「(単)語」なり「言語」なり、漢語を使って区別することは可能だが、日常語としてはコトバがいろいろな場面で多用される。日本語コトバの語源的構成がきわめてユニークであることを確認するため、他言語、特に日本語と類型的な類似が多いアルタイ諸語での状況を比較してみたい。周知のとおり、ヨーロッパ諸語を含む多くの言語において、「言語」は「舌」と同じか同根の語によって表わされる。したがって、以下では「単語／言語／舌」にあたる語が、アルタイ諸語の3つのグループでどうなっているかを見ていく。

結果として、チュルク諸語とモンゴル諸語において「言語」は「舌」と同じ語であり、これとは別に「単語」を表わす語がある(単語≠言語=舌)。これに対してツングース諸語では「単語」と「言語」を区別せず、「舌」は別語である(単語=言語≠舌)。

表2に主なチュルク諸語の語形を示す。トルコ語 *kelime* を除き、各項目すべて同根の語からなる。ただし、サハ語 *ös*「単語」は単独で用いられることは少なく、「言語」にあたる *tyl* が「単語」の意味でも使われるという⁸。サハ語の分布域はツングース諸語(特にエウエン語)に近接しており、この点でツングース語の影響を考慮することができるかもしれない。

	「単語」	「言語」・「舌」
アゼルバイジャン語	<i>söz</i>	<i>dil</i>
カザフ語	<i>söz</i>	<i>til</i>
キルギス語	<i>söz</i>	<i>til</i>
タタール語	<i>süz</i>	<i>tel</i>
トルコ語	<i>kelime, söz</i>	<i>dil</i>
トゥルクメン語	<i>söz</i>	<i>dil</i>
ウイグル語	<i>söz</i>	<i>til</i>
ウズベク語	<i>so'z</i>	<i>til</i>
サハ語	<i>ös</i>	← <i>tyl</i>

表2 チュルク諸語の「単語／言語・舌」

(Öztopçu et al. 1996:84, 155, 167 をもとにサハ語データを追加、トルコ語 *söz* を補足)

モンゴル諸語でも状況は似ており、各項目でおおむね同根語が対応する(表3)。ただし、ダグール語の「単語」は他言語で「文字」にあたる語が使われている。さらに、方言や記述によってはこの語が「言語」をも意味するとともに、「舌」にあたる語が「言語」の意味を失っている(恩和巴図等編 1984:46, 110)。この状況は以下に見るツングース諸語と似ているが、ダグール語はツングース諸語(特にソロン語や満洲語)の影響を強く受けた言語として知られている。

	「単語」	「言語」・「舌」
モンゴル語文語	<i>üge</i>	<i>kelen</i>
ハルハ語	<i>üg</i>	<i>xel</i>
チャハル語	<i>üg</i>	<i>xel</i>
カルムイク語	<i>üg^ü</i>	<i>keln</i>
モンゴオル語	<i>uge</i>	<i>kilie</i>
オルドス語	<i>uge</i>	<i>kele</i>
ブリヤート語	<i>uge</i>	<i>xelen</i>
ダグール語	<i>usug^w</i> →	← <i>kel^l~xel^l</i>

表3 モンゴル諸語の「単語／言語・舌」

(Poppe 1955:142, 153, 孫竹 主編 1990:340, 689 をもとに作成、表記改変)

表4はツングース諸語の状況を示している。ここでは「舌」の語形がツングース諸語を通して同根であると見なされるのに対し(同根語を項目ごとにまとめた Tsintsius et al. ed. 1975:316-317 でも同じ項目であげられている)、「単語・言語」は言語によっていくつかの語源を異にする語で表わされる。エウエンキー語とエウエン語の語形は「話す」という動詞と語根を共有する(Tsintsius et al. ed. 1977:222)。ネギダル語からウイルタ語の語形は *xasə* またはその同源語であるが、これは満洲語およびソロン語(満洲語からの借用)で「勅旨、勅命」を意味する語である(Tsintsius et al. ed. 1975:483)。ソロン語の語形 *ug~uga* はモンゴ

ル諸語の語形を借用したものであるが、記述によっては、「言語」にあたる語が区別されており、*gisoy* (<満洲語; 道尔基 1998:224) または *dziŋdzigga~ dziŋdziwuy* (<*dziŋdzi-*「話す」; 朝克・中嶋 2005:40, 181) があげられている。「単語」と「言語」が区別される点ではモンゴル諸語と似ているが、ソロン語はモンゴル諸語と近接しており、相互に影響関係があった。いっぽう、満洲語の語形 *gisun* は Tsintsius et al. ed. (1975:156) によれば、他のツングース諸語で「シャーマンの太鼓のばち」を意味する語と対応する。おそらく「意味のある音を生み出すもの」というところから、「単語・言語」の意味に変化したものであろうか。

	「単語」・「言語」	「舌」
エウエンキー語	<i>turəən</i>	<i>inni~ilŋi~inŋi</i>
エウエン語	<i>töörən</i>	<i>i'enŋə~iiŋə</i>
ソロン語	<i>ug~ugə</i> →	<i>iŋi</i>
ネギダル語	<i>xəsə</i>	<i>in'ni~ in'ŋi</i>
オロチ語	<i>xəsə</i>	<i>iŋi~ iŋŋi</i>
ウデヘ語	<i>kə^hiə~ kajə</i>	<i>iŋi</i>
ナーナイ語	<i>xəsə</i>	<i>siŋmu~sirmu</i>
ウリチ語	<i>xəsə</i>	<i>sin'u</i>
ウイルタ語	<i>kəsə</i>	<i>sinu</i>
満洲語	<i>gisun</i>	<i>iləŋgu</i>

表4 ツングース諸語の「単語・言語／舌」

(Tsintsius et al. ed. 1975, 1977 をもとに作成、表記一部改変)

日本語(コトバ／シタ)および韓国語(*mal*「単語・言語」／*hyo*「舌」)は、意味区分の点ではツングース諸語のタイプであるといえる。ちなみに韓国語 *hyo*「舌」を比較言語学的な立場からツングース諸語の「舌」と同源と見たり(Ramstedt 1949:61, 金 1985:170)、さらに日本語シタと関係づけたりする見方(Vovin 2010:188)もある。

系統関係はさておき、上で示したような語源的考察や意味的類型論が日本語や韓国語およびアルタイ諸語の歴史的関係に何らかの示唆を与える可能性はあろう。本稿は語源研究と意味的類型論を結びつける試みの一つでもある。

注

1. 本稿は、第11回ソウル国際アルタイ学会(2013年12月6-7日、ソウル)における英語口頭発表(Tsumagari 2013:105-114)を日本語で再構成し、一部を補訂したものである。本稿2-4節の要点は、津曲 2012:2-4でも述べた。なお本稿3節での見方は、2011年4月北海道大学総合博物館における講演「モノとコトの博物館」で触れたのが最初である(講演の映像記録が北海道大学オープンコースウェアで公開されている:下記URL)。

<http://ocw.hokudai.ac.jp/OpenLecture/MuseumSeminar/2011/ExhibitionAndDescription/>

2. コトノハがコトバの古形というわけではなく、むしろコトバが『万葉集』からすでに使われているのに対し、コトノハは中古以後に現れ、コトバと意味的な差異があったとされる(大野 2011:504、山口 2008:359)。本稿では両者の関係や意味的差異は問題にせず、「言葉」という基本的な意味において等価なものとして扱う。

3. 語源説として、ハを繁く栄える「葉」とみる説は江戸後期の国語辞書『和訓栞』にある。いっぽう「言端」説は、古くは江戸後期の語源解説書『名言通』、さらに『大言海』（大槻文彦著、1932-35刊）が採用し（以上、前田 2005:505 による）、今日の多くの語源解説がこれに従っている。
4. 大野ほか（1974:499）の「こと（言・事）」の項参照：「古代社会では口に出したコト（言）は、そのままコト（事実・事柄）を意味したし、また、コト（出来事・行為）は、そのままコト（言）として表現されると信じられていた。それで、言と事は未分化で、両方ともコトという一つの単語で把握された。[中略]しかし、言と事が観念の中で次第に分離される奈良時代以後に至ると、コト（言）はコトバ・コトノハといわれることが多くなり、コト（事）と別になった」。
5. すでに江戸前期の語学書『和句解』にも「葉は木によって特長があるように、話すことによって人が判別できるということから」という説明があるという（前田 2005:505 による）。
6. たとえば大野ほか（1974:310）による「かな（仮名）」の項には次のようにある：「カリナの転。「真名」の対。もと、正式な文字とされた漢字に対して、私的な仮の文字の意」。
7. 次の大野ほか（1974:938）による「な（名）」の項参照：「古代社会では、名は実体と区別され難かったので、みだりに自分の名を他人に教えなかった。女が男に名と家を告げることは結婚の承諾を意味した。また、ナが文字という意を持つのも、文字と物の名称とが区別され難かったことを示している」。
8. この点について、江畑冬生氏のご教示を得たことを感謝する。以下の表では、網掛け部分に矢印の語が重なりうることを示す。

付記：本誌掲載に際して 2 名の匿名査読者から貴重なコメントをいただいた。とくにそのうちの 1 名の方から長大かつ詳細なコメントをいただいたことに感謝する。小稿ではそのすべてに応えることはできないが、日常卑近な単語に対する「思い付き」のようなことであっても、これまでの語源研究ではおそらく述べられていなかった見方であり、あるいは世界的にユニークな事実の指摘にもなるのではないかと、考察の不十分さをかえりみず、あえて提示するものである。大方のご批判を乞いたい。

参考文献

- 朝克 (Chaoke), D. O. ・中嶋幹起
 2005. 『エウエンキ語への招待』 大学書林.
- 道尔基 (Dorji), D. (編著)
 1998. 『鄂漢詞典』 海拉尔：内蒙古文化出版社.
- 恩和巴图 (Enhebatu) 等 (編)
 1984. 『達斡尔語詞彙』 呼和浩特：内蒙古人民出版社.
- 金 芳漢／村山七郎 (監修)／大林直樹 (訳)
 1985. 『韓国語の系統』 三一書房.
- 小松寿雄・鈴木英夫 (編)
 2011. 『新明解語源辞典』 三省堂.
- 前田富祺 (監修)
 2005. 『日本語源大辞典』 小学館.
- 増井金典
 2012. 『日本語語源広辞典 [増補版]』 ミネルヴァ書房.
- 大野 晋 (編)
 2011. 『古典基礎語辞典』 角川学芸出版.
- 大野 晋・佐竹昭広・前田金五郎 (編)
 1974. 『岩波古語辞典』 岩波書店.
- ソシュール (Saussure), F. de／小林英夫 (訳)
 1972 [1949]. 『一般言語学講義』 岩波書店.
- 杉本つとむ
 2005. 『語源海』 東京書籍.
- 孫竹 (Suzhu) (主編)
 1990. 『蒙古語族語言詞典』 西寧：青海人民出版社.

津曲敏郎

2012. 「言誤学—未知のコトバとの出会い」 松江崇（編著）『誤解の世界：楽しみ、学び、防ぐために』:1-49. 北海道大学出版会.

山口佳紀（編）

2008. 『暮らしのことば新語源辞典』 講談社.

Öztopçu, K., Z. Abuov, N. Kambarov & Y. Azemoun

1996. *Dictionary of the Turkic languages*. London/New York: Routledge.

Poppe, N.

1955. *Introduction to Mongolian comparative studies*. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.

Ramstedt, G. J.

1949. *Studies in Korean etymology*. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.

Tsintsius, V. I. et al. (eds.)

- 1975, 1977. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskix jazykov, tom.1-2*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Tsumagari, T.

2013. The Japanese word for 'word/language' with reference to Altaic equivalents. *Proceedings of the 11th Seoul International Altaistic Conference*: 105-114. Seoul: The Altaic Society of Korea, Institute of Altaic Studies, SNU.

Vovin, A.

2010. *Koreo-Japonica: a re-evaluation of a common genetic origin*. Honolulu: Univ. of Hawai'i press.

(つまがり・としろう／北海道大学大学院文学研究科)